



ニュースレター

高良興生院・森田療法関連資料保存会

# あるがまま

No. 24 (臨時号)

2023年10月15日発行

## 追悼 阿部亨先生

高良興生院・森田療法関連資料保存会会長 市川 光洋 (光洋クリニック院長)

長く高良興生院の院長を務められた阿部亨先生が、2023年6月12日に97歳で御逝去されました。謹んでお悔やみを申し上げます。

40年前に、私が高良興生院に派遣された時、阿部先生は高良興生院の院長として御活躍され、斯界では森田療法の第一人者、「ミスター森田療法」と呼ばれていました。

1996年に高良興生院が閉院すると、興生院の近くに「森田療法クリニック」を開院され、外来森田療法を行なっておられました。この時期に、高良興生院・森田療法関連資料保存会から阿部先生にお願いして、先生にインタビューをさせていただきました。2011年5月15日のことです。

この日阿部先生は、高良先生の事を熱心にお話しされました。

「高良先生は、人間味があり自然体で一生懸命なので、皆に愛され親しまれる人だった。僕が感動したのは、ある時、奇妙な姿勢の患者さんが来て、診察すると質問にも紙で答える状態だった時

だった」。困った阿部先生は高良先生にこの患者さんを診察してもらいました。診察が終わると高良先生は開口一番「いや、あの人は本当に苦しいだろうなあ」と言われました。

阿部先生は「この事があってから、それまで自分は患者さんに反発することもあったが、それからは、心の中で、苦しいだろうなと同情心を持つようになった」と述懐されていました。

このように阿部先生は治療者としての高良先生を尊敬されていました。また、人間としての高良先生にとっても親しんでおられました。

このインタビューの時、阿部先生は86歳でした。「自分が診療できなくなった時の為に、患者さんの紹介状は皆書いてあります」との事でした。

2年後、2013年に阿部先生は、森田療法クリニックを閉院され、何人かの患者さんは先生の紹介状と共に私のクリニックに来られました。この患者さん達は皆、今も阿部先生の事を「ミスター森田療法」と思っておられます。

\*\*\*\*\*

## 阿部先生逝く

近藤 喬一 (元大正大学教授)

この年になって親しかった友人の追悼文を書くのは辛い。こっちが先かあっちが後かと思っていたら、おいてきぼりにされたという感じがする。もっとも阿部先生は私より2年先輩になるが。

最初の出会いはもちろん、大学病院の医局と思うが、正確には興生院で会ったのが初めということになる。つまり、昭和54年頃の、はるか昔であ

る。お互いに性格や趣味がそう一致しているわけでもなかったが、仕事の面でもプライバシーの面でも親しくお付き合いするようになった。いわゆるウマが合ったのだと思う。今こうしてお互いに行き来した日々を思い出すと、限りなく思い出がつぎつぎと湧いてくる。その一つ一つは年をとった今となれば、H・ヘッセの誌的表現を借りると

「はかない夕雲のたわむれ」のようなものかもしれない。しかし若かったその頃の二人にとっては一喜一憂したこともなかにはあるだろう。

たまたまここで思い出したが、阿部先生は当時ジャズに凝っていたこともあって、クラシック一辺倒の私にクールジャズの効用を強く勧めたこと

を覚えている。一夕新宿のバーを紹介され、二人で出かけた。蒼い海の底のようにしんと静まりかえった雰囲気の中で聞かされたピアノの一曲は、とても印象的に残った。

阿部先生、どうぞ新しい絆に身を委ねておだやかに、そして静かにお休み下さい。

\*\*\*\*\*

## 阿部先生追悼文

丸山 晋 (元ルーテル学院大学教授)

素敵な思い出ありがとうございました。

阿部亨先生の訃報に接し、最近にない悲しみを受けています。そしてとても残念に思っています。

阿部先生の思い出はたくさんありますが、そのうち、2つを書かせていただきます。

ひとつは、昭和50年代の初め、私が30歳少し出たころ、阿部先生は40台後半で、働き盛りでした。ある時、興生院で診療していた私に、先生が「森田療法」という別冊の小冊子を下さったのです。この小冊子は、当時発刊中の中山書店の精神医学体系の一卷で、「精神療法」の中で阿部先生が書かれたものです。この本の各パートを書く著者は、その道の大家が書くのだという暗黙の了解があります。そんな立派なものを、私に、署名入りでプレゼントしてくれたのです。ちょっとは

にかんだ表情で、いかにも謙虚な態度が忘れられません。

もう一つは、これも興生院での話です。診療の合間のことでした。先生は、何気なく、夫婦というのは、お互いに空気みたいなのが理想というのです。森田療法における医師患者関係も、そうなのだというわけです。私は、当時、ガンガンやる森田療法を志向していたので、内心、反発を感じておりました。しかし中年を過ぎたあたりから、そのことが少しずつわかるようになったのです。そして、阿部先生が、多くの患者さんに慕われた理由も理解できるようになりました。今、この「空気のような関係」は、阿部森田療法の極意だったのだと理解しています。

阿部先生、永い間のご厚誼ありがとうございました。安らかにお眠りください。

\*\*\*\*\*

## 高良興生院と阿部先生、そして私

元・高良興生院入院患者 今井 壽正

私にとっての阿部亨先生は、終始中落合の高良興生院の敷地・建物と共にあり、翻って私にとっての高良興生院は、恩師高良武久先生の後継としてその閉院まで長らく院長をされ、その後も跡地で「保存会」を支えて来られた阿部先生なしには存在しません。

先生との出会いは1965年の秋、当時大学生(法学部)の私が高良興生院に志願入院した日に始まります。阿部先生が入院した私の主治医とされたのです。35日間の入院中の日記「興生院での生

活」は私にとって掛け替えのない宝物であり、縦書きで各ページの下3分の2が患者の供述用(青ペン)、上3分の1が医師の指導用(赤ペン)スペースでした。1週間の絶対臥褥明けの初日から毎日私の日記に簡潔かつ的確なご指導をいただきました。内容と共にその字体は先生のお人柄を今でも彷彿とさせる非常に読みやすいさっぱりとした達筆であり、そのコメントを反芻して次第に納得させられました。

私はこの入院によって神経質症の軽快が得られ

たのを契機に一念発起し（オヤのスネをかじり）、医学部に転進し1971年に医師となりました。精神科でなく脳神経内科医となりましたが、以後高良興生院での入院経験を踏まえ外来で「森田療法もどき」を実践し今に至っています。その後も私は単身実家を訪ねる気分で毎年秋の週末に欠かさず高良興生院にお邪魔し、その時そこにおいでの高良先生、阿部先生、森口婦長、丸山君（作業指導員で私の高校同級生！）らと歓談しました。1996年高良先生のご逝去によって一旦途絶えた興生院とのつながりが復活したのは2008年に就労センター「街」内の保存会からニュースレター「あるがまま」をいただくようになってからです。2013年には阿部先生の米寿お祝いの会に参加、2016年秋に

は保存会「心の健康講座」でお話する機会をたまり、2018年には関連する「生活の発見会」の協力医に登録されました。

これと前後して私は阿部先生と数回往復書簡を交わし、森田→高良→阿部先生と3代に亘る「森田神経質」の理解と「森田療法」の時代による変遷等に関して質問しました。ご回答の締めくくりとして2019年4月晴れた日の昼下がり、保存会図書室で足立美知子事務局長にお茶を入れていただき一緒に先生のお話をじっくり拝聴する機会を得ました。その時確か93歳の血色の良い元気なお顔と弾むお声に接し、私は心底至福を味わいましたが、先生はさぞお疲れになったことでしょう。

\*\*\*\*\*

## 阿部先生のこと

岩田 真理（お茶の水セラピールーム）

阿部先生の訃報に接し、高良興生院の面影がまた遠くに行ってしまったような感慨にとらわれます。

私が阿部先生と初めてお会いしたのは、はるか昔、高良興生院で開催された「森田正馬全集」の編集委員会の席でした。

恰幅がよく、品がよく、白衣がよくお似合いの紳士でした。実に「お医者様」という印象でした。

阿部先生とは、興生院に原稿をいただきに行く際にお会いすることがあったり、興生院が閉院してから「高良興生院・森田療法関連資料保存会」の活動の際に時折お会いしていました。

ところが不思議なことに、阿部先生は少しもお歳をとらないのです。初めてお会いしたときから、何十年も同じお姿の印象があるのです。

いつでもおだやかで、疲れた様子もだらけた様子もまったくなく、初めてお会いしたときのままのきちんとした様子の「阿部先生」でした。

淡々と目の前の仕事をこなされ、興生院の院長としてのお仕事をされていたようでした。あまり前には出ず、生真面目で慎重な感じがありました。そういう佇まいは、高良先生のおそばにいたもう

一人の森田療法家・大原健士郎先生とは好対照でした。

かといって、私は阿部先生のことをよく存じ上げていたわけではありません。個人的に言葉をかわしたことはほとんどなく、いつも事務的なことだけでした。

けれど、たった一回の例外があります。例外だからよく覚えているのでしょう。

いつのことか記憶が定かではないのですが、森田療法保存会がまだ発足するかしないかの頃、会議が終わったあと、先生方と高田馬場の街に出て、飲み会にご一緒したことがありました。

阿部先生とそういう場で同席するのは初めてでしたので、記憶に残っています。私はただ、席の端っこにいただけですが、阿部先生が上機嫌で、お話をされていました。「初恋のきた道」という中国映画の話でした。ちょうど私もその映画を見ていたので、先生のお話に耳を傾けていたのですが、先生はその映画の主演のチャン・ツイイーのことを語って「本当にかわいいんだよ・・・」と特上の笑顔を見せられました。（確かにこのときのチャン・ツイイーは可愛くて、私もまったく同感でした）

その笑顔を拝見したとき、私は阿部先生のいつもとはまったく違う、個人的な一面を知ったような気がして、一緒にうれしくなりました。

阿部先生は、長い間、地道にかつての高良興生院を支えてこられました。そこで磨いた森田療法は実践に裏打ちされた確かなものだったのではないかと思います。

しかし先生はあまり自分から前にでることはなく、現場での実践に注力なさいました。阿部先生の真価を知るのは、きっと薫陶を受けた入院生たちなのではないかと思います。そういう方たちこそ、実生活という場で先生の教えを引き継いでゆくのでしょう。

先生のご冥福をお祈りいたします。

\*\*\*\*\*

## A列車で行こう ～阿部亨先生の心を想う～

ドキュメンタリー映画監督 野中 剛

阿部先生に初めてお会いしたのは1997年。当時私は「森田療法ビデオ全集」の制作準備をしていました。私達は初対面なのに森田療法の話だけに留まらず、共に愛するジャズや映画の話に花を咲かせました。気がつくとも1時間近くになっており、お暇しようとする、「まだいいじゃないですか！」と先生は私を引き止め、その後も話を続けました。後日その話を藤田千尋先生にすると、「阿部先生が初対面の人を引き止めるなんて、普通ないですよ。相当気が合ったんだねえ」とおっしゃっていました。阿部先生はそんな人でした。

阿部先生が森田正馬賞を断ったのは有名です。その理由を直接うかがったことがあります。すると先生は、「受賞すると授賞式があって、講演をしなければならいでしょ。僕はそれが嫌でね」阿部先生はそんな人でした。

2016年に阿部先生とビデオを制作してからは、阿部先生、保存会の足立さんと一緒に、定期的に

食事会をしていました。ある食事会の帰りの車中、阿部先生が息をはくようにおっしゃった言葉が、今でも私の心に強く残っています。

「ああ、僕は幸せだ」

それは人生を振り返り、心から滲み出た言葉のようでした。阿部先生はそんな人でした。

阿部先生は、昭和の男たちにみられる権威主義、出世主義、拝金主義といった政治やエゴとは別次元に生きていたように思います。清廉と陰徳の次元。それは明るく軽やかで、まさに先生の愛するスイング・ジャズのような人でした。

私はそんな阿部先生の心を、スイング・ジャズの名曲「A列車で行こう」になぞって、「A列車」と呼んでいます。

楽しかったです、先生！ ありがとうございます！ 残りの人生を、私は「A列車で行こう」と思います。

**【予告！】「阿部亨先生を偲ぶ会」を来春に予定しております。詳細については後日お知らせいたします。**

■編集／発行 高良興生院・森田療法関連資料保存会

◇連絡先 〒161-0032 東京都新宿区中落合1-6-21 就労センター「街」内

☎03-3952-9975 ただし、火、水、木、金、土曜日の10時から16時まで。

◇電子メール info@honzonkai.net

◇ホームページ <http://www.honzonkai.net/>